

新井房夫先生のご逝去を悼む



本学会名誉会員、群馬大学名誉教授の新井房夫先生は、平成16年2月11日に逝去されました。享年78歳でした。学会にとってかけがえのない方を失ったことは、まことに残念なことです。

先生は、1949年東京文理科大学をご卒業後、すぐに新製の群馬大学に勤務され、以後1991年に退官されるまで、教育学部長を勤められるなど、40年余に亘って火山地質学、第四紀学を中心とする地球科学分野の研究、教育に当られ、大きな功績を残されました。

新井先生ははじめ関東山地の古期の地層・岩石の研究に従事なされたのですが、1950年代の後半から後期第四紀の関東ローム層、とくに北関東のそれに集中されました。そして1960年代後半からテフラの鉱物レベルでの特性記載がテフラの同定に役立つことに注目されて、それまで時間と手間がかかっていた屈折率測定に、独自の方法を導入されました。その頃、アメリカでも火山ガラスの屈折率測定はイエローストーン起源のテフラなどの類別に試みられましたが、時間と手間がかかる割に互いに似た値しか得られなかったことなどから、これに代ってEPMAによる火山ガラスの主成分組成が重要視されるようになりました。しかし新井先生は温度一定の条件のもとで、斜方輝石や角閃石の最大屈折率測定を簡便に行う方法を考案されて、それぞれの特性やその組み合わせが各テフラに固有であること、したがってテフラの同定に有用であることを明確にされました。この方法が有用であるとの主張はきわめて慎重で、他の特性（層位、鉱物の組合せ、晶癖など）とともに個々に是々非々の検討を加えたものでしたから、多くの研究者から信頼される

ようになったのでした。そして大勢のテフラの研究者を育ててこられました。

その結果、先生のテフラ特性づけの方法は、今では日本各地のテフラに適用され、そのカタログができています。その結果、列島や周辺海域を広く覆うテフラが識別できました。この種の広域テフラ研究は現在も盛んで、大いに進んでいます。先生はパイオニアとしてその基礎を作られたのでした。広域テフラは、分布の広域性から火山地域の研究だけでは分からない巨大噴火の性質や大きさを教えることになったとともに、厳密な時間指標層として地史の研究にきわめて大きな役割を果たします。このため火山学はもとより、層位学、第四紀学、考古学などの広領域で使われております。

新井先生の実験好きは有名です。群馬大学の新井研究室では、実験条件を一定にするため独創的に実験室と機器を改造・改良しておいででした。1991年定年で大学を退職なさったとき、先生は実験や研究からは一切手を引いて、趣味に生きると宣言されました。しかしまわりの者は生来実験好きなお方故、必ず復帰なさると予想しておりました。その技術は他人の追従を許さないものでしたので、案の定、今度は、ドイツの民家風に立派に改築なさった新居の一室を実験室に変えられ、その結果奥様が大事になさっておられた人形のバレードは片隅に追いやられ、私どもが持ち込んだごみのようなサンプルが玄関にまであふれるようになりました。

先生は自分は職人に徹底するといっておられました。入念に吟味されたデータはまさに職人芸の産物だといってよいでしょう。一般に研究者にも高分解能の分析にたける人、総合や展望に優れた人と、いろいろなタイプがおります。それぞれが持ち味を生かすと、よい共同研究ができるとお考えのようでした。

実験や測定は昨年末入院される直前まで続けておられました。病室でお会いした折、もっと早く検査していたら、こう長くは研究ができなかったらう、よかったとおっしゃっておられましたが、それはご家族の皆さまには不本意なことだったかも知れません。しかし研究者としては幸せであったのではなからうか、と思われまます。

この半世紀、大学や学会、そして何よりも学問の発展に尽くされた先生のご貢献の大きさは、改めていうまでもありません。先生はまわりの人に対する優しさ、心配りと同時に、学問へ厳しい目をもって、安易な妥協をし

ない勇気をおもちでした。かつて関東における御岳第1
軽石層の認定問題や、前期旧石器か自然石かといった論
争で示された毅然とした態度を思い起こします。こうし
た先生の研究姿勢に、私どもはどんなにつよく刺激され
たことでしょうか。

永年つきあって頂いた私は、惜別にあたり、先生にお

会いすることができ、ご指導頂いた幸せを噛みしめ、深
く感謝いたします。そして奥様はじめご家族の皆さまに
心からお悔やみ申上げる次第であります。慎んでご冥福
をお祈りいたします。

(町田 洋)